群の作用による系列データからの深層表現学習

福水　健次　　数理・推論研究系　教授

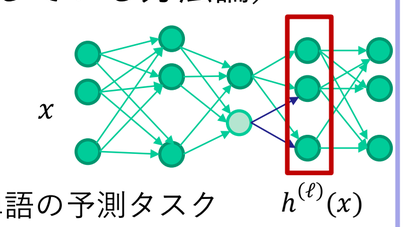
Unsupervised Learning of Equivariant Structure from Sequences
Neurips 2022 with T. Miyato (Preferred Networks/University of Tübingen) and M. Koyama (Preferred Networks)

■ 背景：表現学習，群の作用

● 表現学習

個別タスク専用のニューラルネットを学習させるのでなく，
大量のデータを用いて，多くのタスクに有用な表現/特徴
ベクトルを学習．（画像，自然言語処理で成功している方法論）

- NNの表現学習
  大量のデータを用いて識別/予測タスク
  などを学習（Pretraining）
  - e.g. Large Language Model (GPT4)では，欠損単語の予測タスク



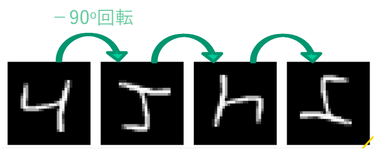
途中の層/モジュールに「意味のある特徴」が現れるはず．
→ 情報の「表現」として用いる

目的
- 他のタスクでもよい性能が得られる．
- 情報の分解

● 対称性の利用　– 不変性, 同変性

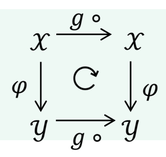
「対称性」の数学的定式化：群の作用による不変性
群：「回転」や「折り返し」を一般化したもの
e.g. 可逆行列（掛け算），並べ替え

・群の作用　$G \times \mathcal{X} \to \mathcal{X} \quad (g,x) \mapsto g \cdot x$　（e.g. 行列をベクトルに作用）
群の演算を保つ：　$e \cdot x = x$ (e:単位元),　　$(gh) \cdot x = g \cdot (h \cdot x)$

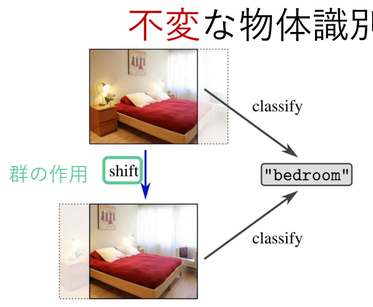


・不変性，同変性：近年の深層学習で有効に利用されている．

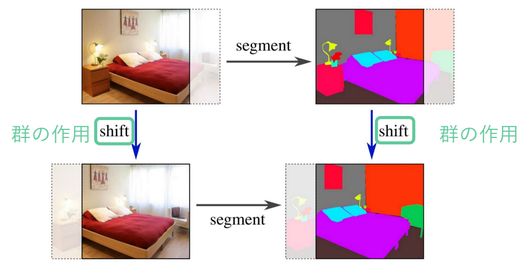
同変 (equivariance)
Def. 集合$\mathcal{X}$, $\mathcal{Y}$ に G が作用すると仮定する．
写像 $\varphi: \mathcal{X} \to \mathcal{Y}$ が同変であるとは，
$\varphi(g \circ x) = g \circ \varphi(x)$ $(\forall g \in G, x \in \mathcal{X})$.



不変な物体識別



同変な画像領域分割



・ Architecture: モデル構造により同変性実現
Convolutional Neural Network (CNN):
シフトに関する同変性　[Fukushima 1980; Zhang 1988; LeCun et al 1989.]
G-convolution NN:　一般の群作用に関する同変性.
[Cohen & Welling 2016, 2017; Cohen et al 2018.]
E(n)-Equivariant graph NN. [Satorras et al 2021]

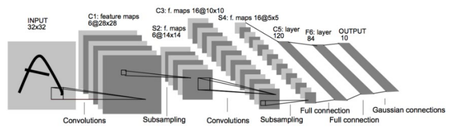
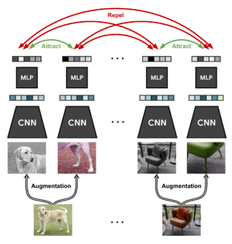


Fig. 2. Architecture of LeNet-5, a Convolutional Neural Network, here for digits recognition. Each plane is a feature map, i.e. a set of units whose weights are constrained to be identical.

LeCun 1998

・Data augmentation：　データ拡張に利用
データを変換により拡張して学習する．
自己教師あり学習のキー技術．変換したものは近い表現
SimCLR　[Chen et al 2020],
Contrastive predictive coding [van der Ord et al 2018]　　etc.

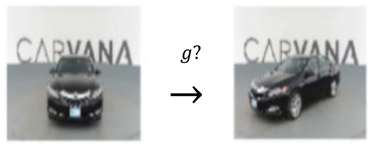


SimCLR

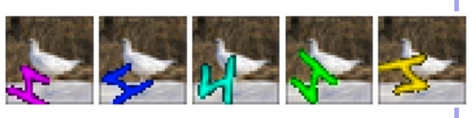
既存のアプローチでは群 G はknown

● 本研究の目的

・潜在的な群作用を用いた表現学習
「動き」の中に有効な特徴が潜在している



・群作用により生成される系列データからの表現学習
・群の作用は潜在的，陽には知らない
・定常的な系列データを仮定
・多数の系列データから表現学習
・群論（表現論）によるdisentanglement

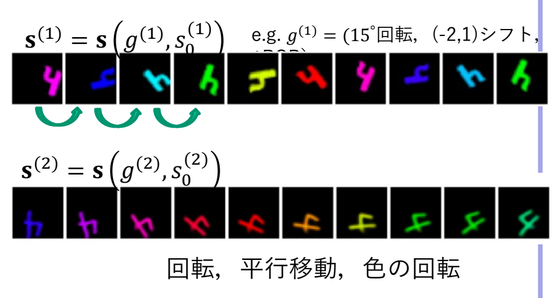


■ 提案法： Meta-Sequential Prediction

● 問題設定

データの生成モデル：群作用による定常な系列データ
G: 群，$\mathcal{S}$ に作用.
系列：　$\mathbf{s} = (s_0, s_1, s_2, \dots, s_T)$.　$s_t = g^t \circ s_0$,　$\mathbf{s} = \mathbf{s}(g, s_0)$
$g \in G$ は系列ごとに異なってよいが系列内では一定.

多数の系列データからの教師無し学習
G も $g \in G$ も作用も知らない



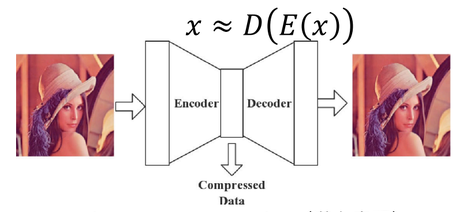
回転，平行移動，色の回転

初期画像 s_0 と群の元 $g \in G$ を決めると，ひとつの系列 $\mathbf{s}$ が生成される．

● 基礎モデル：Autoencoder

データを圧縮するモデル
$\min_{w,\theta} \sum_x \left\| x - D_w\left(E_\theta(x)\right) \right\|^2$

$z = E_\theta(x)$: encoder (NN)
$x' = D_w(z)$: decoder (NN)



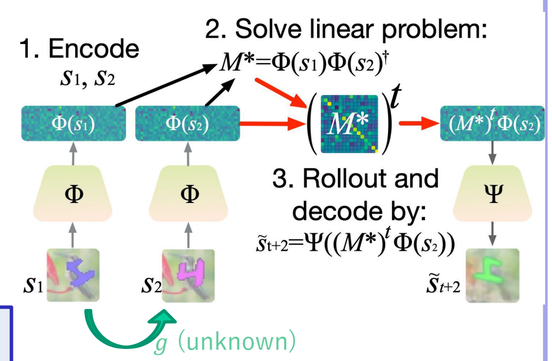
Latent representation（潜在表現）

● AEによる線形な遷移則の学習

$\mathbf{s} = (s_t)_{t=0}^T$.　$s_{t+1} = g \circ s_t$
Autoencoder (AE):
Encoder $\Phi: \mathcal{X} \to \mathbb{R}^{a \times m}$, Decoder $\Psi: \mathbb{R}^{a \times m} \to \mathcal{X}$

潜在表現の遷移則は線形：
行列 $M_{\mathbf{s}}$　系列依存.
潜在空間は行列：
表現能力を落とさずに $M_{\mathbf{s}}$の
次元を小さくできる.
$M_{\mathbf{s}}, \Phi, \Psi$ の学習

$M_{\mathbf{s}}\Phi(s_t) \approx \Phi(s_{t+1})$　[同変性]
$\Psi\left(M_{\mathbf{s}}^{\ell}\Phi(s_t)\right) \approx s_{t+\ell}$　[Prediction]



MSPモデル

● 群の表現論によるdisentanglement

群の表現論（表現の既約分解）→ $\{M_{\mathbf{s}}\}_{\mathbf{s}}$ の同時ブロック対角化が可能
系列に依存しない基底変換により，同時にブロック対角化可能
各ブロックは基本的な線形**変換** → **分解された表現.**

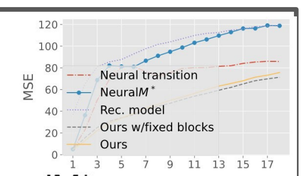
$[\,U\,]\{\,M_s \;\; M_s \;\; M_s \;\; M_s\,\}\,[\,U^{-1}\,] = \begin{bmatrix} UM_{s_1}U^{-1} & 0 & 0 & 0 \\ 0 & UM_{s_2}U^{-1} & 0 & 0 \\ 0 & 0 & UM_{s_3}U^{-1} & 0 \\ 0 & 0 & 0 & UM_{s_4}U^{-1} \end{bmatrix}$

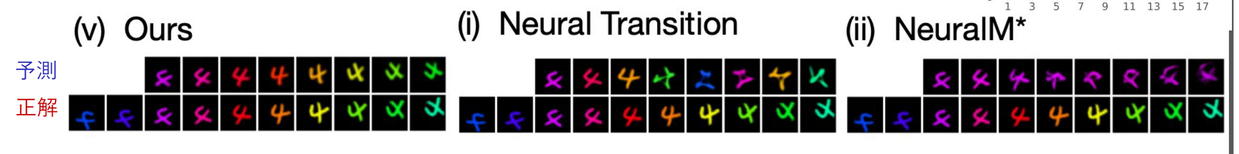
基底変換 U は共通

群の表現論によるDisentanglement

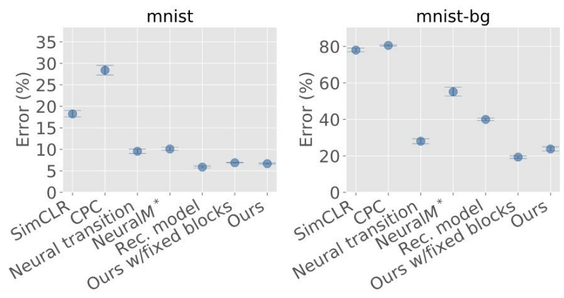
■ 実験

1) 予測性能

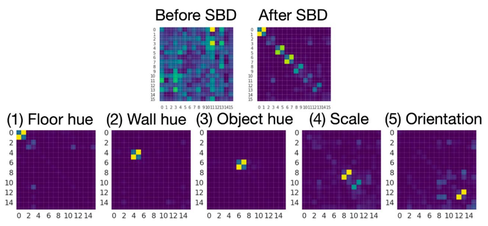




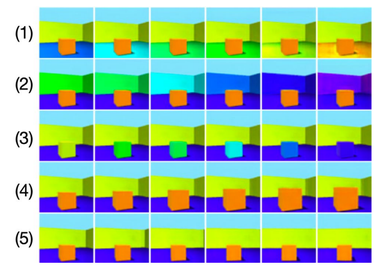
2) 獲得された表現による識別性能
潜在変数 $\Phi(s)$ による識別
注）「４」の画像のみで表現学習
→「０」-「９」の１０クラスを線形識別



3) 表現論によるDisentanglement



同時ブロック対角化により得られたブロック



各ブロックのみを取り出した M による
生成結果